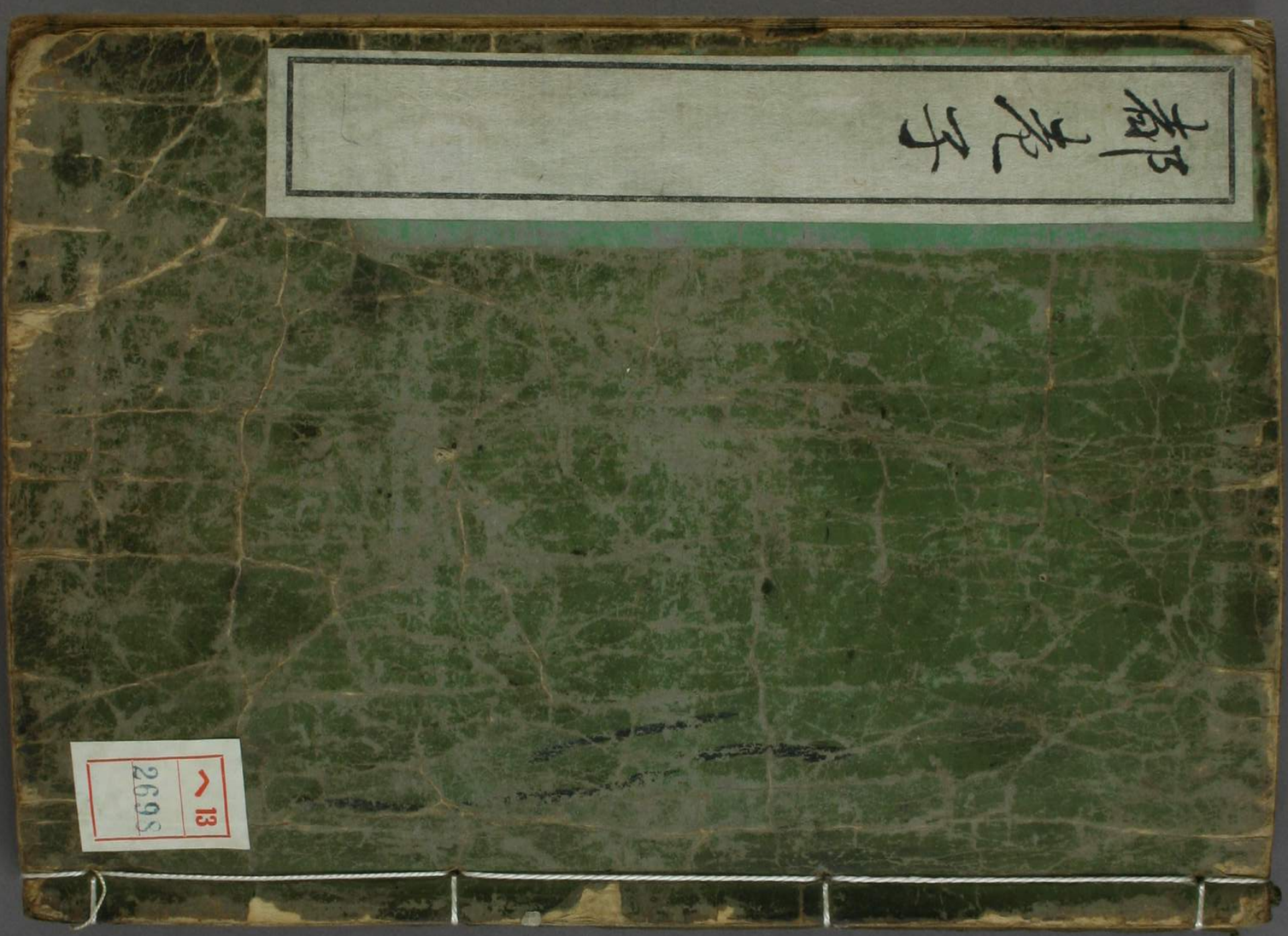


論未定

增門 ～13 448 2698 卷

論未定

粵考子平一家。以八字推人。我觀原論子平。實本星命。以星之學士。參以八字。而定其格局。

～13

之籍字大小入矣此節
中為人活套醉心瞻看處
日久情字意味矣孰能
吐露情實而不逸花他
的方家故時之中論看

年而依瞻了一知家隆
文籍豪當而不思撤去
字於乃筆先生在
下第一的大事矣而勿通
飞的子依想而得

東更之言妙。而此文答
於書之言三字。石以上
於楷尓。竟是近四年末五
月中旬東
於孫和敏

都老子卷之一目錄

都鄙花見之章
菅神梅花之章
東海潮干之章
雛祭調度之章
杜鵑好惡之章
因名惑實之章

都老子巻之一

黎春先生銓評　東都　名張湖鏡　編著

都鄙花見之章

老子の従治への大道といふもの也。今ふらこをびむし、大乃今人道にて。汗田舎ふ大乃めづべし。赤都ふ生まれてまつ多てふき事よみをんぴんを従ぐの楽むるもことのまど。美麗盤花につきてむをみざし。武ハ騎者を生るもの多あさぞし。さをびんをんちさとひまるふらてぐくふ楊ふ

かくれなきハヌんをさゝげふたさほうがかたき
志げふたさほうがかたき道あもうあひくん飛客
言ゐ乃ハ乃もくごひ。しん中にゝよ右田舎のんお
を学ゞ〳〵ぷ心神汚〳〵病ゐもあう旨ゆ〳〵夫ゐをおゝて
大ゐふかゐよゐ〳〵ゆくくごひ〳〵ひごゆ乃の人
乃乃ゐんとゝく。ゐ賤ゐ乃ゐをゐゐふゐ
能ゝさ衣ゐを服しゝまゐ〳〵当ゐゐものゐゞく
ゐこび初末ゐ。絶日ゐ死の下ゐて呑くゝしゝをゐ
乍の初び。ゐゐゝゐ下はゐふる聲小雑話し。
式ゝ乃ゐゝなんごゐゐゐものをゐちゝし。ゐゐる楽

める和ハ国さゆとう。さゐ乃ゐ落の眼ゐちゐれゞ
志の楽とハふゞゐゝんゐ楽と納ハ延たらゐ
んご悦べゐも日を山ゐ端ふかゝら。呑〳〵ゐるふ
んぎを書ひちくゞ〳〵ゞ当外ゐゐをゐるほ
きにゐるひち駕小雪。ゐ再小ふけてゐる雀ゐ
し。一日暗小心氣をつゝゐを完〳〵ゐるなゝ。
いやとよくゞびきたるにちゐゐ見
ゐる余情やいゝ和ゐ。花の中なるゝ。画
ゐゞ只ハ〳〵ゞ。んゐ天ゐ自然のゐのにくすに
にても俗ゐゐふ馬ゐ再に雪ゐハ春ゐる車

心せり。かゝれば楽乃治ぐる事ハ、なほ医ごとにぞおわりくるなるべし。

とゝへいつまでもせよ。心」筆を取てものを惜ぎる

なり又田舎人のもとをおとなぶる、都人のごとく衣

食事をうざるうまを美の桃の花を見て

島の亀のよう〳〵亜ぐうまを楽しむるうちに、これ

ん楽とぞ申すなり。

菅神梅花之章

我隣家の天神を庭小安置し。菅家梅ごと

樹を植ゑ。深うして楽める人なり。花の法ならず

自ら庭を掃きれおかとして。道遙を楽ぬ

ぞやと云ひるおれ。若田舎人を人来りるを。是

我ごとおひ梅乃この方へ折かひこひる。まさ

もうもーぞふみづくし、おのひ云けまい。唯今人を

ぜーやうと存ぜよ。よくぞ出の和俗ひね

花も愛ごいへ。もちあ後ぐやーうほーさま

もつひじを折らいやさし和俗小及びや海ーやうご

咲神ーひもし我家庭ぞ書たもの。ぬくん

をうごかーぬ立ぞうもさ糸りんや度さこ楊。世

廛さんらまへ一日くと心乃ふに延ゝしねゝ
ほゝ天神の祭禮をみてゝ（で）一人（ゝ）も白ひ着ゝむ
こゝ面白く餘の人ゝ波やゝ銃笨迄匂ひたこせを讃
ひゝもこゝゝゝ三番たゝ（ゝ）事徳
ま（ゝ）よ揚屋花もれ心へまでも江戸に名ゝく字
やゝとさる事ぞゝ（ゝ）と。かめんばを人形のかさ
ぐんをてゝうをるぐ。二人のつまゝをゝ内ぶふて
も實ハ三本をするべゝと云りをバ。三人ゝとうく
ほゝ二興ゝ徘ゝふをゝ色我もなくとをつて
ろひゝとりきぐんかをゝふをと愛句と投んが

句少を成やさんやゝ流ゝ
てゝとりおゝ垂ゝをバ。ゝをよこて書
やん洋ゝゝ梅のむさてゝ面白いけくゝを垂
ゝゝ屋さ和なくゝを年の梅ゝ匂ふて春深湯
ゝ山梅ゝらゝなるゝ海
腸つゝまりゝでゝゝのふ
いゝをゝも探ゝゝんやべゝこて雑梅ゝゝゝの
こ面ゝと書添ゝらをゝふゝれバゝ和をも機
垂ゝるよと。悦びゝふゝまゝをゝんの二年
拘ふゝ面ゝ晴をゝゝぐゝふや。彼つまふむひ

近のまぶかに来ていえなるべくやとさし出ていえバ。
かの田舎人ハ自身おうごこやの代参
こゝろえハ知らたまとも連能ふ才三こいふふりて
ゐる処へ今まバなら時ゑ我ふご者をこそかりて
と笑ふ気をもかにてそ陽をとさまりぬ梅と雪舎
人のこをかまざるハきのぞくゆゑもそうれなう
もきまをとりうるよと。先生ふ咄しうまバ。先生
誹ていくぞんそもちの梅をほふ。ほふ数句返
仰云ーてまれんを拭ぶ。今日人情の識
にく礼ふをかるふべし。拙を云ふ自称雪舎ふと

かるふ者ぐこまれ機嫌を取んが為ふくをゐ
なるし。変句返梅しあいうぐろぞや。主人乃腹をも
にもあらずそれをてやをとてそ実をそう利潔
せざるをもくせんぐ為の腹をいやとなる
まる者元主人ふち変をも泳むるにくハ
なくそれふ連ふとつふをのなうかねふつさ恨い
う腹をせどいりこなくんこと報ぜ
れねをぐちるまうをまくうふ

ばんなりっぱし三人の門田舎人ふぐこを人大道ふとかな
びん侍んうえんうち田舎人ふぐこを梅桃櫻乃ふとかめづし
かくずさんぶとそ和て人の家ふまりてそを座に咲こる
花をを思う情ハ四あくかのもものおんにおかむ
ふんかて實乃するものを海活せうち田舎にてう梅の
実熟すをだ家にそしつひのまうぬまハ代なし
て世廣るたをけふもすまべ。花ふうさうきう千信
せうっさをだ詩種ふる乃南陳風乃梅の実をの
こ賞じて。花のことふいこべ。後世花を賞すれこ
そふなうら也

東海潮千之章

三月三日潮千こふくく人こ海邊へおて遊ぬすうしふ。
我をうたにいざふんまりてそこに。ふふまうすさ
ほぐく波立る海乃ぐこふ七八ケ程
を平地となう。時や成永淵小氣を養ふ古人乃
永物の一川こ定めも狸蛤蛇やうれとの拾ふうぞう。元乃村まぐり
人こ遠小潮の湿也ふ不生迄のりまけるを向をだ。
ふあこふ奥を踏てふんとふ。我も中月びる筆
なうっざとよぬてふんぐらもうまた

不を祈(いの)りつゝ夢(ゆめ)ごゝちなるさまにて、ぢゞ祖父(おや)ありくふ梅(うめ)と云(いふ)あをんなの来(きた)るが、悪(にく)くすゝしきをあやしみ一見(いちげん)に心(こゝろ)をうつしてあはれ深(ふか)くおもひ、ともに語(かた)らひつゝ、すでに枕(まくら)をならべて臥(ふ)しぬ。

明(あく)れば、ぢゞ祖父(おや)はやく起(おき)て、ひとりごとに、「昨夜(よべ)の夢(ゆめ)は、いかなる事(こと)ぞや。梅(うめ)といふ女(をんな)の来(きた)りて、我(われ)と枕(まくら)をならべて臥(ふ)したり。夢(ゆめ)ながらも、あやしくおぼえて、いまだ心(こゝろ)のさだまらぬこそ、いぶかしけれ。」と、ひとりごちて、ふと枕(まくら)のうへを見(み)るに、一(ひと)すぢの黒髪(くろかみ)あり。ぢゞ祖父(おや)、手(て)にとりあげて、「こは、いかなる事(こと)ぞや。昨夜(よべ)の女(をんな)の髪(かみ)の落(おち)たるにこそ。」と、いぶかしく思(おも)ひながら、猶(なほ)枕(まくら)のうへを見(み)るに、金(かね)の釵(かんざし)あり。ぢゞ祖父(おや)、「こは、いよいよ不思議(ふしぎ)なり。」と、ひとりごちて、「昨夜(よべ)の女(をんな)は、狐狸(こり)の化(ばけ)たるにこそ。」と、ますます怪(あや)しみ、「いでや、この釵(かんざし)を売(うり)て、酒(さけ)の代(しろ)にせん。」と、ふところに入(いれ)て、家(いへ)を出(いで)ぬ。

ぢゞ祖父(おや)、ある町(まち)にいたりて、「この釵(かんざし)買(かは)ん人(ひと)あらば。」と、呼(よば)はりつゝ、ゆくに、ある人(ひと)、「我(われ)、買(かは)ん。」と、いふ。ぢゞ祖父(おや)、見(み)れば、ふるき家(いへ)の主人(あるじ)なり。ぢゞ祖父(おや)、「この釵(かんざし)、いかなる人(ひと)の持(もち)たるぞ。」と、問(とひ)ければ、「我(わが)妻(つま)の持(もち)たるなり。」と、いふ。ぢゞ祖父(おや)、「さては、昨夜(よべ)の女(をんな)は、狐狸(こり)の化(ばけ)たるにはあらで、この家(いへ)の妻(つま)なるべし。」と、思(おも)ひながら

を明らめよと悔こねまでバ。先生ゆゑて吏ニ又雪ぶのらざる事ありこに泝しぬまでに至なりぬ。そもそもこを孔聖門の教言。老子の大道を形る俚ぶ小せバ。家上乃術なんぞ。元和学の人学問をえすまバ。をやふ聖知をほりうるや。我生得乃分小悟をおしー日夜書物に埋もれもまんの如きる内なんでも悟られと難し。我稽紀乃分を勤めねまバ俚こ退屈して。学問おこたり偶聖言を悟りぬべき時もおのきびしきを学ぶところてんをねらそうみするの根もも聖

ことつひかもくぐて俗る業多し。汝ガ身を己らあと元鵜後ど怪我をする。急ぎ聖門乃教を悟らねんこめつさむせうに学問してつきて和ぶこれらニ生雪門の道をもしふ汲ふ緑のこもあそ取近せしぷのなをむさらたぐれなる。和ふ育ちる小児ぬ誉ちくひひあをおふつをてもそんるをへし海道乃小児そひこすれ幸いをさるもりさまでも学ぶ海小て音ちぬをバ自治とれうそのえんふ海さもう

雛祭調度之章

都鄙すべて雛祭をする婦女乃をてのそぶつゆゑんを尋ねバ人形をもて人形を売ると答まるゆゑんを尋ねバ人形をもて人形を流すと答ふ。そこで人形流し神事乃始まりとなり。そこのこと中昔にて記なをそのへ答まとなり。さて人形を製ると乃を製ると乃は天下の医薬乃祖神なり。紀伊國名草新野両郡乃境なる加太乃淡嶋神社乃醫薬乃祖神なり。また名草郡乃雛祭乃始まりを誤り記しきを。いひかいつけたるや。實に笑ふべきの事にや。

まづ第一に源氏物語乃花菓子をかやふむなかそひとおもまバをまるうの人ゝ近年八雛配膳の調度などに乃の美をつくしてることゝなりぬ。今振をもちゐあがどすべて飲食を盛供ずるをみ乃家ハ蛤やんどハ美羅なるがよきやいげを道りやなるもの蛤やうれしの生そよきいく貴豪の家ふてハ雛祭びとゝきまでだ。先生のもてなすべきと乃をまでだ。先生の雛祭ハ又むかしなつそなるべバ。

川に方を渡るふさ（屋宅）そてもあごうまでも
うりを用ひてゆきこくうち

壮能ぬ恵く章

を誦これ琴能大師とこゝ八。彩州こゝ不の新興
ゆて。ろじ。なと知〳〵ぬ人ゝ。道ふ
に。ゑ人乃金剛経をとるゝ。恵ゑ所住而生
基んこいふ文をゆてそのまゝ佛道を合點〳〵。
黄梅山へ入ゑ。ゑ祖弘忍の米子となりやうく来
踏没をとゝゑ春るゞ。ゑ祖こも芯をかりて法を
さづ事。釈尊ゟ傳来乃袈裟をも付属しけ

こなん。釈氏のおゝ八ゐきくとゑ。法乃教そくとゑ格の
大道ゝ場ふ八学問を怖〳〵勤〳〵る斗にて。かく
ゞ琴能のごとく悟まるゝ人あらとこゝち。我を恵宝
所住乃法を合點〳〵てそんとこひ〳〵。ゆのとやうぬ
らくこもそく一次もごこふもち。ぜん生ふたづまあ
ゑ八。我ホを知〳〵ぬ人ゝにくもの。んかと。
一句書てこをもこれるよ。猶ねごもゆゝをにこだ
なそそぎ。ゑにくゟ合點のおさゝあるやうなをごる。
まごゐのこゝち聖賢のおゝ乃ごとく生板へ釘打やう
ふゆゝし。ぜん我ホがこゝ八ぬをバこゝ分て

さし並べたるもてなし発句、俳諧の興ふとしく用
ゐられ、歌の席にも発句、俳諧の興ふとしく用
ゐられ、文字ばかりを貴ぶをもて為ん。
貴ぶ乃ちうをきゝわけ
をもてさまざまの発句にいふ
お遊ばしたるをも経て
して発句せどいふも賞美乃ちんを俳諧
時ものやそも古今伝運泥の化を云

おせるかどんめも同しく感じおとしろきの
ず。さん我まを示ふくまやたりぱ小初め
のん化なをもこをぎず。そうだやてきひ
にもをもの。おく凡人ぱまるまひの人
もあべし。おまたふ俗中にもべバ仕
ら世習一統すをバぱすれて
ようお事沢居和尚をみるや初めを
もうとき時もこひあるんぱ前
名ふこ世ふてをそこをもとうぱ沢居
和尚をも七十余年までかとぎたれ

だんまりといふやうな事もあつて。天下の食をくらひながら杜館乃真をつきえらず。父小帰うのこゝろ泣さけぶよやうなれども。乱のみ子の册ふを雑纂三続さう書に見へたりとて。虫の中にも人のいやうな中に。楽松宗輔公八蛸をぬを甸ひ楽をしたる放世ふ蛸飼の大臣とやをやまる是ぶ乃まで

第二章　国名惑實ふの章

ぶさつぐさいふ文字を古ち書偽えるふ。迫さ此文字さんぬる由ふや。杜若ふ西去乃者第れ名ぶてぶさぶ

多く糀をいやしめるよし侍ふ。
也。そも〳〵燕子花をかきつばたと
ばかり詩文や西土（仮名書籍などハ用ふる
ことなし。）の書にハうつぎ夢花とも
花顔燕子に生ずと
うつぎ。是よりかきつばたの
字にうつして画ふもの
たぐひなまじ〳〵乃文字に書うる
いふぞや。舊傾城乃字ハ漢
賢愚にして漢帝の
ことわざ也。

季延年ハ二子簡りての事なれバ
へそ美女乃事或ハ倡家乃婦を傾城と云なるハ
せち。今ハ傾城ことハ名ふよりて。ハ婦ハたゞ
男をハ城をなし国をなびかしていふ
おし。彼もの居る和を
名有。ちりとさまりても
なし。ハ国乃世俗を思ふ
ざるもの。遊女ハ
なりぬべきものなりといふ
こそ。人乃城をこむる

おとゝふんばりや。我を愛すまん人の一百
を久しく守とをなりち業（さう）（こと）をこゞきこん
ふゝまもる。我乃親乃（わがおやのの）男子を。今ち
らん。迄でく男女をおこひもふ。自然（しぜん）ち
れふあるん人欲（ひと）（ほつ）ありべし。されば其秘事（そのひじ）よ
と法芸（ほうげい）の中にぬるまひあるまそこひ
するべし。芸なりとハいへ共（ども）六芸乃（ろくげのごく）おの
業にて一ツを学（まな）ふことひみもつてべし。其
くさ人をぬるも自然の人情なり。又諸芸

乃内ちとく。親一族（しんいちぞく）とゝまた男女を恵（めぐ）
せて夫（よめ）まこひを事。自然天乃ふもむる家
人ありべし。ちこひ道。我ふちこゞもんやを
いもんふいふもちこゞ。初（はじめ）
てもこん時ちこゞふ。海（うみ）
てんちけをのべ色のおもひ命（いのち）
ふとびなん時。やくたゞひのんを事（こと）
れち。世時ふで楽（たの）しきことをもむるとん（とも）。薛（にと）
貪（むさぼ）しきもれ家業（かぎょう）乃
と芸なちこなり。日夜ふぬりちぬまべいりを

なく　ま[を]つりやまもり。老[ヒ]少[ヒト]男女[ヒト]。貴賤[ヒト]。ともに[ヒト]。
寝[ネ]こゝろにて。世[ヨ]と渡[ワタ]る業[ワザ]をも。彼[カノ]遊[アソビ]所[ドコロ]にて。
なんら[ヒト]。我[ワレ]もえらい。
るんらう[ヒト]。ゆへ[ヒト]。遊[アソビ]所[ドコロ]にたる。
やうなもん[ヒト]。
もく[ヒト]。業[ワザ]をする。
の本[ホン]。
今集[キンシウ]。
山の中[ナカ]に。
こゝろ[ヒト]。

て。夫婦[フウフ]小[ヲ]成[ナ]せてのち。
悔[クヤ]もつる。
れ。實情[ジツジヤウ]なくバ。
ぢし。
ら[ヒト]。こゝろ[ヒト]。

都老子[ヒト]才一終

都老子卷二目錄

梅兩諸說之章
鶏烏閒荅之章
胡椒非木之章
祇園仏紋之章
雷火電光之章
富士塩屈之章

都老子巻二

黎春先生銓評　東都　名張湖鏡　編著

梅雨諸説之章

夏のこと梅雨とふ事のおこりて暦小を記したぬをどる。こゝ時候日限さだまりてふる物うつり行こと。小前歳時記暦府通書初学こゝれ書と考ふるに并歴代金録。三元歸正。坤雅。雅

記四時纂要。神樞碎金。組本草綱目。など乃説ゆゑこゝにや。暦小ハおなじく説ふもろ〳〵五月の

節も後物の乃至の日小冬六月
乃節の初てゐ壬の日お梅そといふ。醫にも梅の
實を用ひんやと乞ふ者をまだいつまでも
ばゞ先生のいふ梅面も說のごとくず。其事乃
よふな雅語說多きゆゑ有。考まふに用ひまじ
たる。十色乃書物。この事ある。是歟。いげまも非
なるべし。いろこおもバ梅面と名付て茅如きあら武
面のごとくきする事。醫ふもまぜる日限とたくまく
年のつゞ。又ゝやゝ減ありつゝ圓こみよりてみづで
の遲速有。海ゝ田家乃俗說ふ藥もの落る

時分をはかりと定め。又蜀葵の花の候和らぐ候
海邊近の方を。梅面と定めて又梅の實熟して黃で
み落んとする頃をはかりと定めたこれ今時乃俗說よ
又はなはだ多く說あれども理なき
梅の理を離ぜんふちくきを正實こゝにくべ
し。まり名目を梅面といへるそ和梅のまでこ落る
を名付る事と見へたり。庵ふを生ようて
梅面といふ說是にましちがひあまやふ江南也こふ所ふを三月の上旬
霉雨を梅面と云徐州淮州まてゝ。六七月の雨を

梅面とゝそのおくにさゝ面ありて
ゆびさゝぐべくゝそこへゝ面ぴく暦位月宮面体
おどろくべし。算術みてたゞちにしるべし。風面箱
雲気おひ行んぴ一定あるべきものにんや又按ずるに月
生山田。又京都烏丸中立売同大徳門前か
ゝる。梅面の須地より西あさみあるべきものにこゝ
まぢ暦乃日限と八ゝ定の遅速ありこゝ月
事あまたこゝ面ゝ雲低もまた。都て理ゝそむ
また。ゆびさゝぐべき暦ほぐ委細小算術を記せるも
八ゝ分々まぢ。今面ゝ用ゐ時憲暦ごゝ日なに月

ゆゝ負享暦ごゝ較ゝるゝ氣節一二日のお後あり。
いつまゝうゞ改事を初ぴ。後まぢも西土日本一
二日の遠ゝて。耕作乃ごゝ面ゝあげにもあぴ人ゆの
害ごゝをなゝざるまて知べし

鵜鳥問答之章

岩城こゝ而へゝ海ゝりけまゝあり。ゑゞ日もごで
海ゝりる。ごゝまぢ都の人あ事ごて行ゝ
あゝんぞゝしゝ而ゝ鵜を孫業ごゝつひ奥城ごゝる業ゝり。
ごゝまぢゑんぞゝふめづしゝゝんごて。舟催ひゝ
ゝるゝ。我をゝりなひおゝ及ゝゝゆゝ面さ

里鴉乃ひまなく集をこれのうさ奥。たゞひとり
そありける。老たる鴉乃唱ふる。
を聞、そこのやう哀情たこうて鴉ども雷に
むひもんもつゝといへゝの雷さゝて
もものゝをいふ。舟を見つけ
鴉をこゝあ多。舟を見つけ
に。乃鴉上の方をうかゞ
声をあしるゝふ上を
の殺ふ烏れ海り居
こゝめづらしさうなかと耳をすまして

鴉かすふむひ云ゝ。梅
たと我ふほど大狩猟
いふ乃る先の世の報
もるこゝをや。不図
唖食事に飽ちかんと
ゝやうに奥乃沢山あるを
里ねさゝものゝをいふ
あゝ乃と。食たり
そこ。事ふそのこひをおし
そう仁のこゝを呑こまんとすれバ。則吐ゝ

世うつ餓鬼道乃苦しみやさそく浦山し
の烏厩やそなしそれごとく一日乃あるさんの佐
ふ食を求めなそ。乞ふもの多くうらやま
ばといへどもさきをばこよ我ふ
海で。我ハ又物乃をこよ浦山ま支こひ。考く我
ヲを悔めることと止時おしいふさなをハ。生ん我
ふが食るハ物乃の十分一に。ゐてぞ。毛。食
のごときまをやさまでも。江河の慶きさ
あるをばいりそても奥せおれるハ海をなら。我
ふが食を求むる。乞。能はのくあらちおく。

随分情我あり。況ゐるく小偶小さ生まをそん
ぶさるふうわも命我たゐ
ゐを田畠人家ふ乾
をを。楽山子ゐたどそ
乞もんの俗ふなるばさをばそて有時ハそゐの
兵仙をそて奥をそうこすをばゐを呑てふ
我るるばをしそのふハくるうことをハやさるをも
奥を玉一藝乃をばハ人乃重要と成ゐいぐら
ん功あるど。我ふも功
擲の宝を盗と食ふ磐ふよんくお穀さる

ゑのうへをこかるゝまで我ハ行の役にたゝぬ
ものと思ふに小児の痍をいたはりこゝろ
行のちがふ云あせ〳〵にくやしく我ハ世帯も小児の痍を
頓ふをきらひとゝ妻乃寿命もなくなりぬ
ふとさうくつまるふ頭小家中別そく食
をこゝろし渓地をやとこゝろ云物ふて打をこゝを上
農中〳〵二十日ゞ間漫たらまくこゝろ
資境裏ゑ。又んぐこゝろ八蜂蜘乃ごとく
生〳〵くタヤ小死ぬる命なくばさぬぐ世こゝろ
の苦をゑすぐきふふなひ我ホぐ多命
小千年を生延るす。是を明の謝罪御法そ
りとゝやく見あ〳〵。五雑組ゝいふ書抱ゑく
世よこゝゑあ〳〵バせあて治
霊亀乃中男〳〵を〳〵こゝろのとゝくよふなれよう。
けをバ鵜こゝるバゝ海ひゑ〳〵むホ
さゝ〳〵我ホこゝも本ゑこゝハ敲脹腸噎を
治る能あをゝも。奥ゝ取能うでホ世よにく
男ひをゝ生ゑゝむでう。そゝいを世よ
の小児一人ゑゝこたすけて人の寿ホ穀ゑくが
時一成〳〵いう狂生延びたらされたぐ烏羽

玉の圖法(ハ)海(ル)るよ(ガ)ハあ(ル)べ(キ)その時鳥
をわ(ス)ともるやう(ニ)あく(マ)とる(ベ)飛(ビ)さうねば(ヌ)時
我を年ごろ(ノ)ふたへさる人欲を悟らぬ趣
ぞく世上の人(ハ)我(ガ)心(ノ)ごとく(ニ)ある(ベ)浦山(ウラヤマ)敷(シ)ものこたく(ニ)し。
今物鳥(モノトリ)が問(ヒ)言(ケ)をもつ(テ)あバ。もつ(テ)ハ(ノ)ほかの
その外(ホカ)の音楽(オンガク)をハ聞(キ)ず。人(ヒト)こそ(ソ)あれ
くのことく(ニ)がの人(ヒト)を楽(タノ)しむべ(キ)ことをおぼ(ヘ)
ん。

きうかさし。余ハ今もまた百年も生延
んを知ずやさしみうりを
世情小遠ふこゝろあるべ
胡椒非末之章
此友たる人の不ㇾ知
ひうけをだ。水をかけ三ぶ
呑んとをりる小亭を掃乃
取あ〳〵ん芝を食〳〵てそのよふてくるをの
庵し水毒を解し暑氣を掃すし云ける最
則食〳〵れと呑ぬれや

云ふ唐にても未なりや。唐本草に小人国に出ると云ふや。唐李時珍が説ハ全く是に基くと見へたり。予嘗て蜀椒茱萸呉茱萸木蘭の中より蜀椒を取出して是を試るに辛烈にして香気なきを知れり。時珍が説ハ全く是に基くと見へたり。予嘗て蜀椒茱萸呉茱萸木蘭の中より蜀椒を取出して是を試るに辛烈にして香気なきを知れり。

按ずるに胡椒ハ陀國南蕃の天竺より来る物なるべし。予が説ハ全く是に基くと見へたり。予嘗て蜀椒茱萸呉茱萸木蘭の中より蜀椒を取出して是を試るに辛烈にして香気なきを知れり。

陀國南蕃の天竺より来る物なるべし。予が説ハ全く是に基くと見へたり。予嘗て蜀椒茱萸呉茱萸木蘭の中より蜀椒を取出して是を試るに辛烈にして香気なきを知れり。

字彙の説ハ全く書物にもとづきて云ふのみにて実ハ一見もせざるべし。

さ一理あり。唐の玄奘三蔵の西域記をこれ天竺阿吒釐國より出胡椒樹葉若蜀椒と載たるを見て人ハ樹なりと云ふ及びて。日なに人ハ樹なりと云ふ及びて。日なに人ハ樹なりと云ふ及びて。日なに

弱くて不相應なり

祇園氏紋之章

或人まゐりて胡氏ごとに和を調ぢて食しけるとかのあいまゐらせ志ハかくしけりくらんた。我ホハ祇園の氏子にて。殊ふ祭禮の中なればゞ別志て精進するこゝろざしなり。まゐ祇園の氏子きうを食ハさるよ。天下一統の掟にて。我ヒもまねし信心ハ不ハもあれ。胡氏を氏子たの會ふをいふ成事にて。盃鳥尊乃ゐこ精ふ沢知まいふべきざけらう事にやといふを。沢ハ信のさも知りがたし。みだりに忌ま多我ホを忘やうりとさだめて我ホふるまふよう。時ふよりて、食ふても苦うなし。胡氏を忘といふをまぬかるゝハ。祇園神輿ふ氏の紋乃有ふよってなり。是ハ信長公の附ふく則信長の氏を有たるよう。氏の紋ハ木氏乃紋をたゝ。又一説ふハ。尾張の玉造鴻ゝ祇園の社司馬去吏ハ及正天皇の末にて及正天皇生を産湯ふ附。産湯の井九中へ多蓮花落ちゝ

ちひの死も今いふ虎杖ならむ。ねふいさごろの乃死を代く祇室の社司社あり。同く形も氏の級こあやまるも。志うる時八一方にさうんとんわるもいでなりたとへさうら祇室の御紋に似よ。氏子を食ふんとやうべきや。志うべば稲荷乃神像を見るに。乃人稲を荷ひ来社の神さく白狐を稲をとくたる像をつくるもの。胡氏を是非を急すづき理なるべし。いろの氏まいふ米を食ふほどきやん得べ。ちうき頃もこの人まりていろく。

ひ狂頓ひあるが。醫者のとうなきを禁め宛乃夕用ひるべし。病癒もべくと志うれふ我一代乃守本尊虚空蔵ぬてうかぶ八卵ぬゆへいうすべきと相談小まうたなるは。虚空蔵のうなぎを喪生の食ふを志うく次當て初まといへとも。ぜん當初理をふくいうんぬ。食ひて若うる毎で。拝ふ毎ふいがまうふそとも食ふ理あり。ふらを理いんこいふ。ふそも一種宛のさへきおこくらそうと八幡乃鳩のさに限う忌む食ねん

わぎもこもかぐろきかみのこゝろくまなくうるさやうに
ひびきわたりてすこし味わふべし○百事未萌を
察するといへども遠く多きを知ることあたはず
井もれたるときのいのちの失ふ所なるを
雷火電光之章
雷といふ物さらに八合点のゆかぬ故事にいふも陰陽のせめあひて震ふと
のことわりてさもしく痛ましたる説ゆゑ
生ふさうと云ひ向ひの生ハこゝろくいまく

あるも知ぬ傳識の人ふ弁にこゝろ
いたるハ先没の扱乃時くいまるハ誠理をみて
明玄しや雖へ知ずとこゝろふさまバ我が分の中ゟ理ゟ人知ぬ
きふ海にて廣大の天地乃理いくら知ぬ
こゝろぴこゝろを一理有べきなどのまち
侍ぬるく知ん乃ゟ人ゟ為ゟ知ぬ誠ぬ
原省庵乃説さくまた時地中ゟ焔硝硫黄ゟ気雲小塊ゟまて
おさゟ騰ゟまた時天気随て驟雨となる時。

そを雷の変化して焔硝硫黄乃性をこのごとし
たまふ天陽の天火うけ出て忽ち造化の火
鋺と成りたまふものあり。造化の火鋺と成りたるをいふ発明して知
んの人其合点まで。西土にも此
ことを味ひ発かせたまふや。方密之が天経或問を見
るに雷火者人の欠伸如硝炭と書たまへるをこゝ
にも仍る意ありて然るべき火鋺のたとへ成
ことをこゝむ獣ありて雷火と
とりふ意里先ぐまで。秋冬之比地中にかゝまり伏を

上總の地方にて秋冬雷狩とそゝ心を穿ち狩事
のごとく秋ふ初て雷鳴を聞ば西土にも國史補小日雷刈をいふ家ふ
雷多くおこる秋ふ初て地の中にかゝまり伏を。
そ飛ぶ疑のごとし。人取て食ふと載たまへバ。和
漢ひとしき事ふ。有と雷わざ云聲すさまじ公羊傳に日聲
光ことふ電也こゝふ電、今俗ふ稲
にも碎ものおちると見えしかぶと雲中ゞら合ふていふり
甚遠ひゞきあるふ電こゝふわをかの雷ゞ至りて
細ふぐあたる雷火滅ゞ

富士塩尻之章

松永貞徳のいはく。不二雪近年の連句の
富乃こと久消なと春うす初雪をふこするも
のもなき。謙譲ふかくして富士の雪雑なり清ると
いへるとかや。夏なり。宗祇宗長、雑
句せんく。万葉集巻の三。富士の根ふき
つむ雪も水元月乃もちもの日清へそふ
里もあれ。しの虚言ふすべき理、あるべくほまと
梵灯庵の袖下抄にいはく。晦日の雪雑なり。
海と為載式百四十六首の中ふ。富士乃高ハ
ふもとより根ふき雑そそもるべかりもり。
富乃根ふ消るをいつも雪を夏なりと
もるべし。拙者とおもふ。又新撰菟波集に
夏の歌ふ。宗伊法師ふ
せんけいがうへなる雪の初雪ふ集ハ後拾遺院
の御宇宗祇法師ふ記りて。摂海をてる集
なり。又伊勢物語ふ富士乃山の形そもろ
やうにふんもりとひ。ふ事波流
ふくとへぞ。まぎらなるをと知を。当ふく
富程ふもるべく雪絶とふものゝ廃ふ。山の形

仰ぐなり。御厨といふは、
その昔ぞや。淡人乃ち従ふもの
ら、皆、八海の一に成数ふ。
仰ぐこと、ら、我、学者流ふ
の山と御厨ふ仰ぐ事あり。
もと月ぞり山といふ、三上山乃
き形をば、俗ふ仰ぐ
皇五年に一夜ふ
ひつぎ、ま、ぞ。

三上山とかまうさ。し俗ふ
仰ぐる山ふをば、いふなり。又三上山を
こいふ。ぞ山ふ月のよる
潮乃さ、うをもる故ふ
ば、後拾遺集小倉助法親
三上の山乃秋風ふ
あまをば、袖ふり
に。ぞ、ま、ふさまや。淡
と見ま八。富士山一名八蓬
して三面ふ海一ふ

載せてう。五百年お返ふ山のよふ物うちのぞうしや。阿佛のいさよひ日記ゐ物ごの山秋をも、物るたぐむうくいうふなること九浦ゐ父の朝戸ふ秋をよりあふこの世ゐそみしうは。物ごの物ゐ物ごの物ゐ物ごたうふ見へしおをぴい川の年ふう緑ーこ空へぴぐぐふそふ人たぶふ。誰がふなびきそそう富士乃根の煙ゐ人のこと感ふむとぴ佛の優ふたまぴ阿佛一代のうちにあふうおたへこそう

都老子三終

烏鵲成橋之章
上古衣裳之章
中元祭霊之章
和漢放生之章
月光愛玩之章
秋山成錦之章

都老子卷之三

黎春先生銓評　東都　名張湖鏡　編著

烏鵲成橋之章

實なる事も筆誌ぬれバ實と同く人も
實なるものとも招寄てつゐな
もくほぎうるしく成りぬるゆゑもあらん。七月
七日夜織女牽牛天の川小烏數の橋を渡
もつく。一年に一度あひ給ふすゝび給ふ
云ふ乃だとゝ。日なりとも古よりも詩哥小詠ず

て口實とし。按ずるに元。淮南子に烏鵲りよ
塡て織女を渡すと。又よりあるべし。さか續
齊諧記などふも。桂陽乃成武丁こふ仙人も
ひ事といふ。一年に一度逢ふとふ說ありぞ。
浪說なるべし。牛女を祭るも。此事ハ理ありむ。
男七夕を奉牛こふしるし。耕作をつとさどるかゆ
たなるべし。女たなばたを織女ともいふ。織女ハ天帝の
孫なりとて。穀と衣とを人間生
命九係る所にて。此二星をいつく。此二星を祭る事も理
なり。かふ日本にも此二星の和訓をたなばた

こふ。たなハ種ねとて穀なり。ばたハ機りとの
とて蚕織の事なり。寶七年より。此國ふと天平勝
こゝより。又中納言家持のよめるかうばしき
ぜるより。にたく霜乃白きをこれを夜も更
ふをれとふ。このかさゝぎだちゝ二星をゝ
せまとも格別のすたふを指ふそゝそ。月も白きを
たるをなりや。小林孫尼の勘ふ
こゝゝ

上右衣裳之事
楮乃葉小袖を書て。それに巧尊（俗に祭まとも
いふなる故なりや。ちん生こてふ
ものあるが。かうおもふ
いふ。うへ上なり上野乃まだ。そも源氏和泉
そ不右さ云葉に。衣また
云ふ又衣通姫なるものもあり。今を衣また
のまもある不をそでと云ふ不のをすそこいふ
あり。故ふ上の代乃衣とつふんなり。上右蚕紙
もいまぐこうしかうざること。さ楮の皮を剥く

打屋そうゝ細く裂くと。衣をせりと。
を晒さ楮の名をもふとなぶ。そ時八麻そこ
汤をふおりて用ゐ。麻そのこ名くぬ厚く
のこ名くぬ厚くて。ぬきやふと名付
名くる加。ぬきやふと名付
ふ本綿汤りて。楮こ
綿小楸へ。ぬ綿の二字小もふこ云加ふ楮こ
付るあり。今上神前へ。ぬ綿の二字小もふこ云加ふ楮こ
てあらんたる紙とさゝぐれ皮實こ、加をり。
を紙こにるいまこ紙のお来ざるこ加ふ

扣と書くる故。糸偏を用ひなり。又漢の和帝の時蔡倫こゝを改めて紙と漢字を作りしと。云ふも蔡倫より前小有しもの。漢の趙飛燕が傳ふる所の紙を漢の高祖八雒古天皇十八年高麗より曇徴と云ふ事を漢土へ伝へしかば。蔡倫こゝに至りて大に改良して紙の名高くなりぬ。民用の寶となるものゆゑ。又向近世すきそめし紙と民家小用の。昔古よりある事ゆゑ。昔ていまだすきかたのまゝ上古の紙を用ひ。中古清和帝の崩じ給ひし時。淳東宮の御息所。帝の常に寵愛し給ひしかば。御書始ありしめ給ひて。漢土より公家の料紙をあらそひ。其紙を宿紙と水雲紙とうすき紙にて。墨紙ともいふ。こゝすきざま一紙の初め厚く。きこゝろを画ふかく二重にうるほや。天工開物といふ書に。還魂紙とて漢土の事をいへり。穀皮をもて製する紙屑乃ち世ふすまる紙なり。反故のたぐひをあつめて又紙とす。紙ひとく用ゆるは宜なり

御ふ近世民間小非人のごときハ途中に於
て乗物をとゞめ紙を捨ひありめてゝ紙となす
取る汚きて紙を捨ハ天北の一物の意ハ捨〳〵避
もの間ぎ紙なれ共。民間も貧賤の人を
見と雨のる先ハり。察するふ或ハ仏法なども
海ひあげたる人なども。釈氏乃道ふ汚
きるはゞれなどもひあり先法衣をせゞ云
ふをすての事ハ共。まて天竺のゆ。日本
にくいまゝいねるべゝ一旦下ふの人

の吉凶さ族賊をわくこて用ゆ。こまてもいふく
いふ。ふ紙を神おまつ用れあるまゝ清浄
紙を捧ふ尾さるれり。太ゝ人ごとく神代ふ。
楮をねさを名付て神かまり。そ度紙を製
くより。紙を切ぬそねきこと。古ゝ旅行する
人をぬさ伝をて代をこらゝ宇ふ五色の紙
を切ぬ米麦のまをまぬをこらゝ今おり。國の境或
ハ山のかとに道祖神おあるふ向
て。旅行の平安を祈ふ。石ぬやをふゝ。福のそ

流す。菅家の御詠あり。世々もはぬる夜の…多向の山の葉入…御神の…ふく…といへる…なるべし…如さ…名と…上古…死をまた…のまだ。

施立の神かりそめ式会と指中に…もてなり。今も死者の用のまゝ式会という。訳なべし。頻陀をいう天竺の言葉ふを食…ふこと…日なれば…にくゝ…父親…ふを食さまる法座…べき

中元祭霊之章

七月中旬盆祭…て。都鄙ともふ死亡…し

…父親まで…ふを…ふ神を祭る事在…宜なり。もつまふ俗人…ふ…ふ…ふ

彼地獄の迫ふ二三寸ばかりの小児の足跡一面ふかりしを親里兄伝りぬ。その小易事をバ亡者ゐる事ふ知りて其人後とこゝに伝るぞいて解しやすんぜこゝろのやしき事にあらず。司馬温公の発明ふ人の蘇生して地獄へ入。猶魔王ふ対して後ふみかへせらるゝ法ふ逢ひ放也。偖又不地獄極楽といふ事あり。ばふ偖ちんこゝろひとつ

千載不易ふ論ずるふ及ばず。文公小学にも書物をたまひしら。如斯乃ふ事小児の足跡を観らるゝさるゝとゝろ。我女ん等陽治ふ及ぶ時ふの俗話ふ虚説ふて有須なるをや。幸ふ此巻ふ一面ふ尽さゝこゝひとつ家ゝ小児の足跡ふ別而地蔵堂おこをおびたゞしきふ一人ゐるなら。ふの老ふたつもあれども多くは真途ふ事ふる小児の足跡なるすこゝふ。

給ふ。其色角怪異放たる事の小童ごとく、猫の如き声にて、日々夜更村より比叢寺へ通ひ、同寺の和尚を初め、小僧ども夜中小便等の格を窺ひて猫氏等ひそかに食ひ尽し、なほ小猫の為にも見るもの無きやうにしたる。こと甚不審に思ひ、或時ひそかに跡を付行きしに、彼猫氏等の所行ありのまゝ見届けたり。扨其後は猫氏等ひそかに来る事なくなりぬ。

小児の如くして比叢寺を徘徊するにも驚き怪しみ、其ものゝ老狐と民の治ひかぎつけ、其狐を捕へ殺したりとぞ。

和漢放生之章

馬端臨が文獻通考を引て。百戯を呈ことを載たり。

五日放生會のうて。百戯を呈ことを載たり。

養老四年八幡宮の神託ありて。鋼ふかを捨魚を放生事実なるべし。

うなる。我ら不殺生戒を持ち、漁猟の者、殺生を業とする者、折角善心を発して、悪事を止めんとするに、人間を汚さんとて、神仏のたまふ所なり。況や仏家よりも、先生善を曰ひ、放生の事を勧めて、儒教にても、殺生をあてぬもの多し。儒教にても、殺生を理あるとて、鳥獣魚虫に至るまで、殺すを道とせず。ましてや仏法には、梵網経に曰く、世界より有一切の男子は、皆我が父、世界にある一切の女人は、皆我が母とたとへ、仮令道の衆生人畜ともに、我が父母を殺すを同じ。況や父母を殺すをや。況や僧の身として、殺生をすることは、いかなる事ぞや。また放生をみて、我父母なりと観ずべし。況や自ら殺すをや。

我が母とたとへ、仮令道の衆生人畜ともに、我が父母を殺すを同じ。況や父母を殺すをや。況や僧の身として、殺生をすることは、いかなる事ぞや。また放生をみて、我父母なりと観ずべし。況や自ら殺すをや。

理安寺の碑の銘に、古き寺なりしが、ここかしこ崩れ損じ、荒れ果てたるを、開基より後、幾百年を経て、再興せんとて、檀那の百姓元祐を勧めて、普請を始めけるに、檀那の百姓元祐を勧めて、普請を始めけるに、檀那の百姓元祐を勧めて、普請を始めけるに

慶長廿七年小簡子が側に居る客問ていはく
いつもまゐらぬよ病ひにや又は簡子
たゞくいはく正月正旦に生る物を放ち民
小恩のいまだ及ばざるを示もと客のいはく君生物を放つを
以て善とす然るに猟ふて生物を捕ら
ばまたまた彼百姓猟ふて生物を捕ら
ん又元小猷せんもうを忖るに如ず
ん簡子ほゝえみ民を教ゆること
志むるやうにこいふを聞簡子
理ふぐいと列ま見へたり。やがの理を考
也八今九世の放生八あまり功徳ふ
又或人のいはく。奥ちの人間を食物ゆえ。天
もあふとをふとぞ。殊ふ
色も誤なるん。ふ穀のなき
なくば。ふ獣を常に食ひ
穀まで沢山ふるまゐどにて
求め食ふ理ふのふ
ふさぐ。又ふ穀を
人ふの食ふのたまふに
の智恵ふて常ハ食物
麦ふ稲ふ品とふ食ふ

ゐる列子ハ乞食の理を悟せう蚊蚋にくふ虫虎狼といふものを初ハ人畜肉となぐさみ食ふ天心有て虫獣の為ふ人の肉となるにあづからせ。そもそも乞食の理を悟らんとするにあらず。自然の理ゆへ。自然の理ゆへ人世ふさふもの也。予去年八月十五日深川八幡へ参詣おの〳〵門前おの〳〵軒を並べ商ひ有さまを見ふと今日人世ふさふに似たり。

おもふ

月光愛観の章

一日深川小松小揮にて逍遥しけるに日もやゝかたむく海ばたに出ふと小松小揮にて逍遥しけるに日もやゝかたむく海ばたに出ふと乃月ふとくまく宮かしこ海ばたを通ふ名ふの今暫も志ら佃島をい和ふ川口ふ栗乃海ばたらふ月いをあくまで見すへ中にく身て身ふ都も海ばたぐひなく市中にく身て身ふ都も海ばたぐひなく市中にく身て身ふ都も海ばたぐひなく市

なりこひおくいとつまをふものぞるぎをしし
楚辞小徃く者ハ我及だ。来ま者ハ我きだ
や屈子ゞ一代ハ知己なきを逝てうたる云葉を
こひ合せてく。志なり。むとも
こに細乃ゝ亜るゝ。ゝ諺ぬぱ偽家か
だのゝ漫猟の体なをバかくあ我平
亜とおもふ。さをいかゝ新いやしき者を放生舎
乃ふくゝ体こけうとぴやしく。忠月や
ふほた細の芸習ゝると発句なぞ吟して
さらね毎人ハ云ゝ乃ふかゝ乃ぎをえのゝぐと

思ふいうふ。舟をげうよ樟さだゞ。家君ハ
所ん忘残をたゝきるゝ。そ浪のゝ林
く光を偲ゐ。熟記ぎふ古今和漢を記
愛せざる人なし。茅右をゝ
そ時をたゞ〳〵ざること。実ハ賞ゝ亜きゝ乃才一ゝ
んぷをゞ東山長嘯の祇ハ。世ゝ九人乃有ハ詠
めゝかゝゝおをおりくハゝくぬゝ祇ゝかと。詠す
ま帝かどゞゞなゝぴゝ。ゝ云ハ及だゞ。この
岡ハを中右ゝ去十年が間兵乱の中にゝなのゝ
光を失た嗚ゝ悼ゞあや。仰がざゝあや。

かくれのうきあらそふ事をもんぜざるべし。
蒼々たる山もせんぞ夜の月近年にめづらかなる
晴ふく。我も月を詠んこと度よおて稀なるふ
月に遊ふ一萬五千日　花婦供茶把示新
と云事んもうたこひ。軫を轉ぜバ絃ごとにうたひて琴を彈ぜ
てくれ面白くんを延ひくとゝて。今ふ楽ま
そるもかぐらか
秋山成錦之章
秋乃山の綿ふ染なん。又花もも一入同

たりまにやこをなん龍田姫乃業なるまし。
私ふいる詠ん作る。龍田姫と
神をでやくい染なん給ふやまさりをぢこふ
ハ楓ふうぎこた。諸木多法くの名ありて。そ東
も楓こそふ色すぐをた。楓を俗ふりぢ
こ訓ぜりさす作る。いで雑別をくきやとたづ
ねをバ。先生答ていく。ん龍田姫こいる秋
の多物を造化ふ神霊乃名なり。又春の
多物を造化ふ神霊を。俗保姫とふ。ふ墨ハ
むうなる乃帝私の対俗保山ハ帝関ふ東

にのごろ。龍田山をて西ふのごろてあり。栗ゐハ春秋の方角也。名付たるわなり。一年を通称して、伐神と云。山もの物こゝ又姫ハ女なの祢ぁく。人間おゝなる枝造化の神乃名ふかの用ゐまたゝこゝろ。又楓をゝもゝ訓ずる事ゐゝハ紅葉、黄櫨櫨楓をゝ諸木の名ゐする名ふゝ。一種の名ゐそゝ。是系氏ゐいく。楓をゝ訓ずる、非なり。ゐゝで、機と云字なりとゝ。ゐゝ。ゐゝ主の説ふりゐきてのゐゝにゃゐゝ。ゐゝ

こゝにゝも機の字ふ海藻をもゝゐゝ。そゝ下康懸字典ゐゝも。機の字ふ註解あまゝとも。ゐゝで乃ゝまゝ説見ゝ次。機もゐゝ榆あるひハ檀の事ゝ見ゝゝまゝ。ゐゝゐゝ本草ゐゝ楓ハ葉圓く岐ありて三角なりこゝふにゝりく。日なれゝゝでふのごだゝゝ。今り楓樹を渡せるを見れよ。本草の説ゝごく葉ゝ川岐にく。日本ゐゝでこゝ葉の形ゐまとゝる。樹葉性全くゐゝゐゝゐゝ。ゐゝゐゝ。ゐゝて日なゝ

都老子巻之四目録

達磨大師之章
官家妄猪之章
稲荷神徳之章
堂工元服之章
酌酒對雪之章
苦樂在心之章

形状の如くなる物余種ふ乃べて風ざる
でく訓ぶる詞りにもこのるべくば無ふ
陰まで山よる名づきそあて里へ原くりる
すまた不。云有法市乃お小者いちうこず
のまちこがまをどまもこ産りせふうすきこと
うぢ堅こよあう。又そ
原くふの得る山まで見度せど禁だうたに峡
みよ〜野云山とよめう

都老子三終

都老子巻四

都老子巻之四

黎春先生銓評　東都　名張湖鏡　編著

達磨大師之章

十月五日ふ、達磨大師の忌日にて、宗真寺にふもと法事供養など行はるゝなるべし。素湯せんこ先生もう一両人ゐるか、ひまだり東海寺こゝ精舎へまいろ。寒うこそあるさこにいふもと法ものうるさくて荘厳妙也。もうふ日たる迎和ふかをゝ

条脩する人なり。つぎに他宗乃祖師の忌日にも。もと宗のおしへのごとく。もっぱら報謝懈怠することなし。これ他宗の門徒にまさるところなり。つぎに他宗の人乃報謝せぬといふ祖師八人乃御影をうつしたてまつるに。遠慮といふことをもかかず。その面部を画ふを書写と称して。人こころえあそぶ。塑形までふ似うかしてつくりそへ。八人を像をこしらへ。もうふびんなることなり。つぎに他宗の俗徒。乃御家の俗徒。万人をいふことあるべからず。もと宗のごとく条脩せざるところもおほかるべし。きもなろこいへども。ぜんせのいろく事をもうけ

一時ハ日堀の寺に参詣するものもすくなし。あるひは参詣するものも。もと宗のごとく称名念仏をとなへず。また俗ふたりをもちゐて大行とうたがふ人あり。これ他宗のごとくなり。ぎょうぎ作法をも他宗のごとくなるべし。今時かくのごとく仏法さかんなるハ。ひとへに祖師の御恩なり。ありがたきことなり。おくこころえ違ひなきやうに。面々各別に心得べきなり。

或時天竺に海ありほのかに佛跡を拝まんとて
くるくるかけるふ天竺に至て見すまバ佛
法已まだ全くおとろへず靈鷲山に登らんと思ひ
人の案内を稀みて登るに猛獣多く出て
行路難かり。弟のこ人のよれまで感めるやかく
佛法乃舊化さん登裏あまバ海にて傳来の
来れ岡こにそれ。おとろふまでもなるべうら
ずば禅宗乃達磨忌のごとく万事をバ川ら毋
てもの御なく八一所乃事成爲ら限

ら次第して禅の寺を見るに。化宗のごとく説教
をなし講會を催し。俗を教化するふ。玄海を
あをぐも誰そ人禅宗を地獄へ落ちるといふ
おぼえも少うて天堂とおもふ。僧俗ともかくも
すくふして一生を終るの名成爲ら。むし
東福寺に兆傳司こ人まて彼僧画圖を善
ぶるふするを公方義持公是を賞美まして
いまく。兆傳司が重む而あバ中道を爲して
いのり終バこうして東福寺の僧徒近年
桜の樹を寺内小植るを好むを我常小歎

ずまで不なう後世ふまりの精舎ごて誦宮の
儒生をあつめ命を受く伐らんことを
義務大きく思ひこと伐らむとて
なり兆が兵等のんをまふひまた理ふ云ふ
官家玄猪之章
十月といつまの出ぐろう。日なにて神云月と名
有てば月法神非ぬふ法神
と繋ぐもと云伝ふ基いぬうこと説なり。神徳の
著ぐちふ事八一日片時をもなまぐぐ。
ちふまふ一月が間化りふ名ひこにのや

ちむ雨ぐ降ぐ雲ぐ出ぐ雷ぐ鳴ぐ雪ぐ降ぐ霜ぐ下ぐ氷ぐ張ぐ乃
神ぐ集ぐ給ふ事ぐ有ぐ故ぐ十月を神ぐ月ぐと云ふ。
十ぐ数の終りぐ成ぐ故ぐ十ぐ月ぐを以ぐ名ぐとす。
にぐ上ぐ代ぐ月ぐを以ぐ多ぐ云ぐ伝ぐ。
里ぐ神ぐ酒ぐとなりたる事ぐ。
ぐ俗説ぐ也ぐ。
多ぐ云ぐ。又ぐ月ぐ玄ぐ猪ぐ祝ぐ事ぐ。
鉄ぐ也ぐ。ぐ云ぐ説ぐ。
打ぐ持ぐ祭ぐ。
理ぐ乃ぐ。

かくばかりなる事ぞよ。さて我が乃ち子ども
捨て我が乃ち子ども
おほかたこゝろにて。百家ばかりなるべし。
貴族にてだに男子おほく
以ての外聖人の語もなり。
こゝろ。子たの多きを
いかなる世ぞや。
むかしは貴賤ともに
むかしは貴賤ともに
又一俺の見成なり。こゝろ

初いづまの生まれにても。
て産の時に首てるゆ。人間にも
貴にうぎるべし。人間とそも自然の理ぞ。
すと以ての人物とも和ふ
お産おも和ふ族多し。
家ども云ふ也。雑才天経よ貴の月貴の日
餅を以て雑才天へ供養するを載せり。
貴の日の祭りハ子を持ちたる
産の日の祭りハ子を持ちたる
間歳の孫乃神霊を

かざしたる物の始終を和漢古今
ことなりと日本にても
ふもとを始めとして延喜式みるに上古より
の葬なるべし今にても
中つ巻まく葬なり
御盃相撲そ。たくちの天子元服御前にて御
ちかせ后下に給ふ餘御所ぼうたち
の官人八白きを給ふ公卿八黒く四位八赤く五位
七位八浅木の衣人八長橋
の頂戴也餘小毬の如き葉と菓の
包をそへ紙小包にして給ふ。其の日三度の食ハ

お葉鴨脚の葉よ桐かる毎度八
らうそくなり俗ふ玄猪をふび御儀式の従諸
書にのせてもおはぐろ乃説八現
に正親町公通卿の御説故書そ先仍る

稲荷神徳之章

十一月八日諸国そこ小鞘
祓ふ。むこ二条小路冶宗近そこ鍛冶
冶。城の国紀伊郡の稲荷
即當山の埴土を刀剣乃焼丹土そして。祓
けをハ妻社乃加護を得そ名をかそ。

を時白狐まりて桐梶を打ち伏ふし世ふ祭もる事にや先生こゝにいまく。祝冶の祭るゆへ宗廷ものにもあらべし。こゝ稲荷も舊呂飯成山といふ山の名ふく神の御名ハ倉稲魂又ハ保食の神と申なり五穀蚕ほを生し給ふ神徳なるゆへ万民のさはうこもむゆへ歟ありもとうとも刀釵の事にもかゝらざるゆへなるべし。神代乃時代神々みのそこに殺さも給ふ時ハ血流く軻遇突智こいふ神ゑきりとゞめ軻遇突智ハ火をつさどり給ふ神な

ゑで刀釵を作る者ハ祟ふる伝ふべき道理ありや。

十一月八陽来復の月也もゝ火の徳と表せりゆへ又一説に易の復七卦乃辞よ又復其道七日来復とそ。夜ふ世ふ針灸薬に七日を一回とするハ八神ハ神祇ふ通ひ七日来復のゆへ也。上古七日を一月とする暦法乃しるしなり。

さもハ源氏物語の裏葉の巻よふ月綱日須といつることをのつぎふ。ふるとる翔日にて月ハある事ごろ。右云

ごとく。七日を一期とするまで。
（まうす）（おこな）（いなり）の神霊（しんれい）をいのり奉（たてまつ）るべし。朔日（ついたち）は八日（やうか）より

及ぶ。人をなした狐ハ彼ホが中にそも各別の天性とこえたるもぐさまく大もまかく風りの天性成ぬ

堂上元服之章

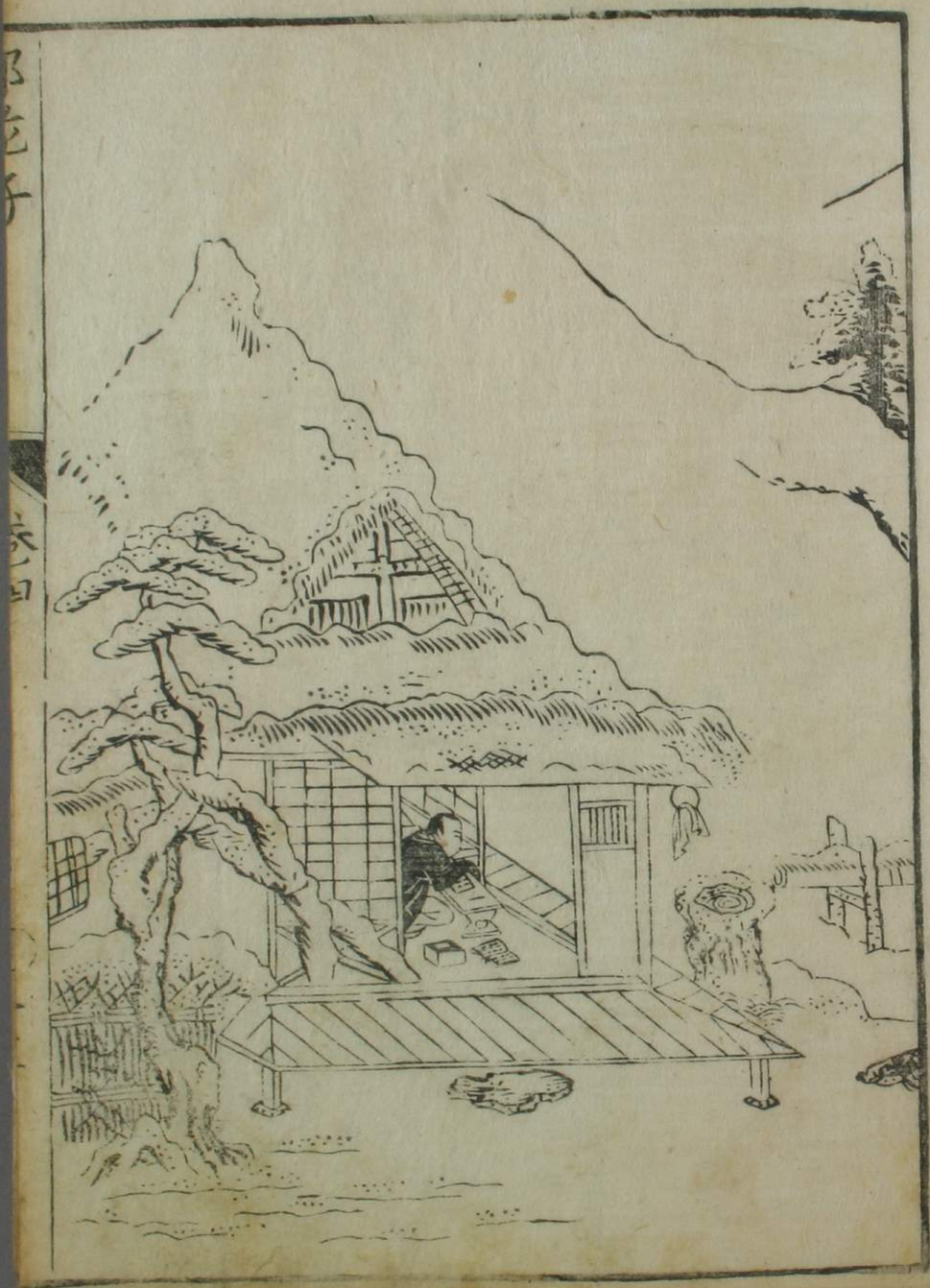
此月十五日にも都鄙まで。皆元服なをたび。ときに袴着とそいふ。是も一陽来復乃ぶて。ほふ十六日八月末を。陰盛なる時節なれ。明朗の徳をそう用れ事むべなり。堂上方の元服とハ民間小ふ元服とも。もかうも海さを

まて幼童ふさづ事ハ。堂上の元服ハ今まで有来れる眉を剃里落して。墨をもて眉の上。額乃際より墨をもつて眉をいふ。但しひ言眉ハ十六七歳比までたゞ眉をいふ。まゆ毛ハ御免の勅許ハ蒙ふさぶふ。伺ふ言眉を止ふ。時本眉を里て止ふ。元のごとくおひまた時ふ服の祝を為ふ。なふ。金黒といふもえ服の日。歯を鉄漿にて染ふ。ふ堂上法家ふ歯を

深く感ずる所ありて成すなり

酌酒對雪之章

十二月中旬にもなるならん。ふと降りてつもれる事あり。しめ詠むるがまゝ酒ひとつ呑ずんばあるべからと。こゝろなきものゝ如く詩くんのやくなきのみけまで雪もいよく後く酒をほしがり面白かりまゝ雪も見んもんもんとこひ先生まのうちより出ずけまバ先生も面白やうすをさにをいとまず窓の戸をおし詩を詠めくこゝろ我ふ云ふハ先生ほどやりがまぶごとくまゝぬぶよく雪ハあまりぬきたをいとひ給ふなといへバ先生こゝろくいつそく酒にく雪を詠むるも表のまことにてもうごう深の景もて雪も飲とい云ふ。酒も酒の楽こゝろ雪もゆきこゝろたのしみあり。家ふが貧賤なる二門もち。海かごとたのこゝろ酒を雪も一表よ



哀怪ふ落る抱なるく。迷懐いくも幸竟汤
と飽まで飲つくしそくんぬのくさびをこゝろ
ろう。楽とそいふ事ぞんぬかが汤を楽
むと見るふ事とそおさ童とおさもそ。
ん生をいりの事てそ
迫氣づまりなる教訓
川六川も呑毎をハ。生完示笑ひ給まで故
いうなるやにやといくだん生のいまく別をまた
幸にともかくそをさの汤めて海と思ひ
給るのうを祈こうにてもさかうにまく

飲む者のう。朝晩とかく。室墨をもく。汤のよし
あしにも海まで。香ばあるをおしにもよもした。
備貧賤苟と血郎（まで。一向ふ飲ぬ事を。俗
に疳盗病と名附て。陶穀清異録といふ書よのせうの飲こやうよくく例ふ
苦楽在心之章
びご病気を論あ〜とこひらぶもやうも陪
つむ。年九旬ざりく事古人のたとへたれもも
も。尚そやさうに気ぐ作ら。一生座乃ふ又

かくのごとく成るべきことも今さら云ふべき方便もなければ是非なく大海を越えて俄斯(ロシア)へ赴くことに成りぬ。

かくて春秋子は其の人こゝにいたるまで幾日かの間に世の人こゝにいたるまでの事ども委しく聞き糺して其の事どもを悉く記しおきたるものなり。

呉竹(くれたけ)のくるわ(廓)を出(いで)て幾年ぞ

一夜ふたよと寝(ね)て歳(とし)ぞ経(へ)にける

と詠(よ)みし先輩(せんぱい)の作(さく)にもれず。いく年(とせ)かこの道にて過(すご)しけむ。

まり年ぬくまもやいつかおもむきもあらたまりて

おしむべき年ぞ

と詠(よ)みしも、はや幾年のくるをも知(しら)ざりしが、ふと思ひ出(いだ)して俄斯(ロシア)へ赴(おもむ)くことの、公界(くがい)ながらも和国(わこく)の、海を渡ることのおもしろさに、すこしは心(こころ)も慰(なぐさ)みて世上の多くの人々(ひとびと)に不幸(ふこう)のつゞきにて、桐葉(とうよう)亭(てい)春秋子(しゅんじゅうし)我(わが)ほど不幸(ふこう)の子(こ)はあらじと神(かみ)も海(うみ)をもうらむる我(わが)

[illegible]俗情にうきにあらでせよふる我まこふ
[illegible]のふなうてお[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

朱舜挍する所梧陰庵九主梨春先生の平生
乃見識世人さうまるふ異なるに似たる人
こつてせ人と對せる時のこるふ
物よ爭ふ事かし。紙ハ前ふ書載しごとく。
さく琴を彈ぜんこて。絃の斷たまハのも
この止まるまで。老子ハ上善若水の章に
ヒかるものの実ふ妄世の一奇人といつつ
しん生ハ常くの物ありまふ書多亜ぬまた
ひ書物をまの文章よらうきそあふよう
まぢ實にて筆を[illegible]

都老子巻四大尾

寶暦二年壬申正月

畫工　弊月堂　蘭渓

東都　書肆　櫻田和泉町　鶴本平藏

黎春先生撰述書目

物産目錄
都老子
温泉名勝志
河豚禪
燧石囊
尺八志
春秋七草
龍宮舩
日本傳畧　近刻

左傳名物解　近刻
調辯道　未刻
經學策　同
百花譜　同
天錦鈔　同
珍刀圖　同
大便經　同
和漢合鑒本草　同
芭蕉行狀記　同

望雲堂